
罪桜綺譚

闇十郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

罪桜綺譚

【Nコード】

N2966M

【作者名】

闇十郎

【あらすじ】

彼女は想い人を振り向かせるために永遠の美を求めた。

（前書き）

気分転換に短編を書いてみました。ちょっとした性交描写があります。閲覧は自己責任です。

願はくは花の下にて春死なん　そのきさらぎの望月のころ

生い茂る雑草を掻き分け進むと、急に道が開けた。苔むした石段が山の急斜面をのたうつように這い上がっている。巨木が葉を茂らせ群生しているため陰気くさく、羽虫の巣窟みたいな山。

お花見シーズン真っ只中にそんな所へ分け入っていく少年がいた。「やつとスタートラインか」

先は長そうだ。独り言が漏れたが構わない。どうせ誰もいやしない。

少年は急ぐでもなくゆつくりと古びた石段を登っていった。

この道の先にある未知への期待感と不安感。それらが縋い交ぜ（ないませ）となって少年の心中をたゆたっていた。

掲示された数字群。そこにあるはずだった番号。爆発する予定だった無上の喜び。

現実は無情に無感動に、ほんの些細なことのようにつきつけられた。

落ちたんだ、俺。

開き直りの清々しさもなく、汚泥のような絶望に沈むこともなく、ただただ何もない空漠が胸に鎮座している。

それが1年間続いた受験戦争のあつけない終焉だった。

友人はみな受かつて県外に行ってしまった、1人だけ残された。

別に珍しくもなんともないことだが、そんな事実慰めになるはずもない。

後悔し、嘆き、自責した。その果てに見つけた答えは。

「——もう一度やってやる！」

第二大戦へと向けられた燃え上がる闘志だった。

今回の山登りは束の間の休息を有意義に使おうとした結果である。
目的は紫の桜。

これは一種の都市伝説。そんな桜があるのかないのか、真偽の程は定かではない。その手の掲示板にこの時期そんなレスがあり、過去ログを調べるとほぼ毎春話題に上ってはいるが、確かめに行った人はいないのか画像がアップされることは無い。その他ブログも同じ。

ネットの情報をかき集めて、総合すると家から電車とバスを使い二時間のしぎやま嶋山神社という場所にあるらしい。確証はないが。

その紫の桜は、絶世の美と称されるもので、いつだかの古文書にも記載されているらしい。

情報が曖昧で辿り着けるか不安はあるものの、桜を見れても見れなくてもこれを最後のオアシスにしようと思っていた。この旅行の後是不毛の大地を強行軍で突き進むだけ。

「もしもし」

「シン、俺ん大学だいに蹴ったんだって？ 何してんだよ」

携帯にかかってきたのは少年——シンの友達の1人だった。

「やっぱ第一志望は外せないと思ってさ。俺もう1年ガンバっから応援よろしく」

「そっか、一緒な大学行かれねえのは残念だけど、頑張れよ親友」
「おう。サンキュ」

友人の言葉に鼻の奥がツンとした。それをおくびにも出さずに答える。

「ところで今どこにいる。駅か」

「どういう推測だよ。嶋山っていう県境の山だ」

「なんでまた……ああ、気分転換に山登りってか。しかし騒がしいな、ツアーか」

「……は？」

話し声も何もシン以外に人はいない。背中に薄ら寒いものを感じた。

「おい、ダイチ。テキトーなこと」

「ちょ……うつせ……聞、えな……」

ひどいノイズに混じって、途切れ途切れの悪態が耳に届く。それも砂嵐のような音に掻き消されていく。

もうダメか。シンが携帯をしまおうとしたその時。

『——コッチヘコイ』

血管を尋常でない速さで氷が駆けた。鳥肌がたち、冷たい汗がじんわりと手を湿らせた。

音が割れたような不気味で不吉な声。

周りには密疎を分けて乱立する木々しかない。

シンはやめておいた方がいいと思う一方で、木立の合間に目を凝らした。

相変わらず日の光に乏しい森が広がっている。最初は涼しくて良いな、と思っていたが今は気味が悪いだけだ。

何もいるわけがない。その思いに応えたかのように、シンの目には何も映らなかった。

「なにビビッてんだよ。バカらしい」

臆病心を罵声して、後ろを振り返った。

すると遠くの視界の端で何かが動いた。

山の急斜面を滑るように横断し、黒い影が太い幹の後ろへ消えた。熊かイノシシか、とにかく猛獣はやばいだろ。それは客観的思考ではなく、シンの希望だった。

この斜面であんな移動が出来る生物がいるとは思えない。平行移動のような揺れない進み方。そうまるで脚がないような。

「——ふ」

シンの口が嘲笑の形に変わる。

ずいぶんと古典的だな。現代っ子を怖がらせるには、役者不足だ。で、俺が前向いたら、そこに居たりするんだろ。やってやるうじゃん。

勢い良く身体を反転させる。

何も居ない。左右を見るも、同じこと。

興醒めと同時に安堵した自分がいることに、シンは腹が立った。

首にかけていたヘッドホンを装着すると、音楽をかけた。流すのは爆音轟くハードロック。音の暴力で何もかも押し流してしまえ。意地を張るな。家に帰れ、と誰かが言っているようだが、ギターの攻撃的なうねりに飲まれて消えていった。

憤りと曲が同調し、酒をひっかけたような陶醉感が生まれてきた。ここまで来たんだ、『前哨戦』にまで負けて帰れるかよ。

高揚した気分はその考えばかりを膨張させ、他の一切を圧壊させていく。

シンは踏破の決意を固めた。

相変わらずの風景の中を淡々と登っていく。木葉の裏が燃えているようなのを見るに、向こうでは傾いた太陽が赤く照っているらしい。

桜があるというのは神社らしいので、いざとなれば——その線はすでに濃い——そこに泊まればいい。寝袋を持参している。

過激な曲は一巡してしまったのもう聴くのをやめる。再び沈黙する森の中に身を投じることになるが、もう十分に気分は高まってきたので脳内リピートでもしていれば平気だろう。

先を確かめべく顔を上げると、瓦屋根がちらつと見えた。目を凝らすと雑木林のなかに溶けるように建物が建っているのが確認できた。色褪せた朱色の鳥居も見える。

思わず足早になる。すぐに門が見えてきた。そこに人が立っているのが見える。巫女装束を着ているのでここで働いている人のよう

だ。

「こんにちは！」

シンが声を張り上げると向こうも気付いてくれた。が、様子がかしい。慌てたそぶりでも手招きしている。

「うわっ!？」

不思議に思ったところ、リュックが引つ張られた。後ろに倒れそうになるが、シンはなんとかリュックから腕を抜いて態勢を整える。振り向くとそこには？何か？がいた。

黒いもやのような物体。何となく人型をしているそれが、驚愕んだリュックを投げ捨てた。

『——コッチヘクルンダ』

これがあの声の正体か。

平和ボケした現代人でも本能なんてものがあるらしく、全神経が逃げると緊急指令を発している。

すぐそれに従い、階段を駆け上がる。石段は湿った苔で覆われているため滑りやすい。何度も転びそうになりながら、死に物狂いで門を目指す。

背後に感じるのはわけのわからない感情の塊。

「っ!？」

最後の最後でシンの足元が狂った。

鳥居を目前にして身体が宙を舞う。とっさに腕を突いて激突は免れたが、迫る恐怖にあてられ身体が言うことを聞かない。

右の足首が握られた感触がした。そのままズルズルと引つ張られて、身体を段差にぶつけながら引きずり降ろされる。

シンが救いを求めて伸ばした手の先には巫女がいた。不思議な言葉をお口走りながら近づいてくる。

途端に足に絡み付いていた悪寒が消え去ったような気がした。安堵して全身の力が抜け、シンは意識を失った。

深海から急浮上していくような感覚と共に目が醒めた。

蛍光灯の光が眩しい。腕を広げてみると畳の硬質な感触と布団の柔らかな感触があった。心地のいい気だるさ。

シンが眠気の余韻に浸っていると足音が聞こえてきて、襖の向こうで止まった。

「入ってもよろしいでしょうか？」

「ああ、どうぞ」

するすると襖を滑らせて先の巫女が丁寧なお辞儀をしてから入ってきた。脇に置かれたお盆には、水を湛えたますと御札がいくつか載せてある。

お辞儀と一緒に白いうなじの辺りできゅっと束ねられた黒い美髪が肩を滑る。紅白の巫女服と墨を垂らしたような長髪。簡素で型にはまったような格好がとてもよく似合う大和撫子。

「目が覚めたんですね。安心しました」

化粧つ気がまるで無いにも関わらず、整った美貌。透けるような白い肌。浮かぶ笑顔は決して人懐っこいものではないが、その伶俐さは神職らしさを引き立てる。

特に眼を惹いたのは彼女の瞳だ。一見黒なのだが、よく見るとアメジストのような色合いをしていて綺麗だ。

「……………」

「どうかされましたか？」

思わず見惚れてしまい、話しかけられているのに気付けなかった。「あ、すいません。もう大丈夫です」

立ち上がりうとしてよるめいた。右足が自分のものでないような異様な感覚。素早く支えてくれた巫女さんには感謝だ。彼女からうつすらと春を連想させる甘い香りがした。

「安静にしないでだめですよ。まだ被いきれてないんですから」

「あの黒いやつのこと？」

「そうです」

巫女はシンに脚を伸ばして座らせた。その時見えた右足には、黒い手の痕がくつきりと残っていた。

「うえ……あ、あれは何ですか？ やっぱり幽霊？」

「ええ、悪霊です。この辺は自殺者が多いので、怨念が集まりすぎると靈感の無い人にも見えるくらい形を成すことがあるんです」

ぶっ飛んだ話ではあるが、襲われた身なので信じるほかない。

「そついえば名前なんていうの」

「あ、すいません。雫と申します」

「雫か、助けてくれてありがとう」

シンも名乗るとこちらこそ、っと可愛らしい声で言うつと手を差し出してきた。

雫の小さく白い手は、想像以上にすべらかだった。

「右足の除霊をしますね。ちょっと痛いかもしれませんが、我慢してください」

雫は手に持った御札に祈りを込めている。

それを嫌がるかのようにピリピリとした痛みと痒みが右足に出てきた。

「いきます」

御札が貼られた瞬間、赤く熱した炭に脚を突っ込んだような激痛が迸った。

「あああああ！」

痛みから逃れようと暴れる身体を制御できない。右足が暴発したようにしなり、雫の肩を蹴り飛ばした。

雫は部屋の隅まで弾き飛ばされてしまった。尋常の力ではない。右足の黒い痣が苛烈な痛みを伴って這い上がってくる。いち早く頭に辿り着いた凶念がコロセコロセと喚き散らす。

どうかなってしまいそうで、シンは布団といわず畳といわずのた打ち回った。

「自分をしっかり持って！ 追い払うんです」

そんなこと言われてもどうすりゃいいんだ。分からないがやるしかない。

身体は転げまわりつつも、じりじりと雫の方へ向かっていた。悪霊たちは本気で殺すつもりのようなのだ。

態勢を立て直した雫が、まずに入った水をシンに掛けた。

一気に狂乱が冷め、凍ったように身体が停止する。

その間に雫はさらに御札を貼り、祈りを捧げた。

氷が砕け閉じ込められていた怨念が活性化してきた。しかし、その抵抗も強まった法力の前では無力だった。

「……………はああああっ」

完全に浄化が終わり、シンは大きく息を吐くと力無く寝転がった。全身汗でびっしょりになっている。

雫が傍に来て、例のますをくれた。

「お疲れ様です。もう安心ですよ」

雫の安堵した微笑と一緒にますを受け取り、一気に飲み干す。

何か神聖なものが全身に回って、巨大な疲れが端から溶けるように無くなっていく。

「すごいな、これ。どういう水なんだい」

「この神社にお祀りしている神木の朝露を集めたものです」

「ごめん、そんな貴重なものを俺なんか2杯も使わせちゃって」

「いいんです、こういう時のためのものですから。それに人を助けるのに出し惜しみなんてしてたらだめじゃないですか」

善意の結晶のような笑顔で言われ、シンはドキリとした。

記憶する限りこんな可愛い子は見たことがないし、こんな純粋な親切に触れたことも無い。

「わたしどこか変ですか」

「え、いや全然」

「でもじつと見てて、口元も緩んでいます。隠さないで言うてくださいよ」

雫が怪しむように顔を近づけてきた。束ねられた黒髪がさらりと肩を滑った。

少し顔を持ち上げれば、そのままキスができるんじゃないかというくらい近い。これを素でやっていそうなのが、なおさら殺人的だ。「ちょ、待って。俺汗かきまくってるから、シャワー浴びさせてもらいたいんだけど」

言った瞬間、赤面ものの発言だったと後悔した。これじゃまるでその後、何かしようとしているみたいじゃないか。

「すいません、わたし気がつかなくて。お風呂まで案内しますね、立てますか」

雫はシンの発言にも気付かない様子で、ふらついたシンの腕を取ると部屋から連れ出した。

今まで居たのは庭に面した部屋で、廊下に出ると夕日が山の稜線を赤く塗っているのが見えた。

鳴山神社はシンが思っていた以上に立派だった。

白く塗られた塀に囲まれた境内は広く、庭一面に敷かれた白砂利と苔むした岩の枯山水がいたるところに見られた。その間を縫うように石畳が走っている。

先上がったシンは、社務所の縁側に座って国宝級の庭園を眺めていた。

しばらくすると、質素な白い浴衣に着替えた雫がやってきた。お風呂上りの上気した肌と艶やかに濡れ光る黒髪が浴衣に似合っている。

「湯殿なんてものはじめて見たよ。この神社すごくないか、色々と「そうなんですか。わたしここから出たことがないのでよく分からないです」

「え……」

「小さい頃ここに来てからずっと。買い物とかは他の人がやってくれるので、わたしはこのお掃除をしています」

シンは啞然としたが、雫の純真性の理由も分かった気がした。世俗を離れて時間が止まったような神社で過ごしていた雫。彼女が知っているのは秘術と経典くらいなのだろう。

だから湯殿で、お背中流しましょうか、と素肌を晒そうとすることにものなら抵抗がなかったのだ。

「つまらなくないか、それ」

シンは思ったことを言った。

御神体のように安置され、無垢なままでいさねられているのがかわいそうに見えたから。

「そんなこと言われたの初めてです。他の人は危ないから出ちゃダメだって」

雫は困ったように見つめてきた。

その瞳はお城に閉じ込められて外の世界に憧れているお姫様のものに見えた。勇者を名乗るつもりはないが、ちよつと連れ出してあげたくなってしまう。

「ならば、明日俺と一緒に出てみないか」

連れ出すことで彼女の聖性を侵してしまうかもしれないし、自分の下心を否定することもできない。

それでも雫に遊びを経験させてあげたいという思いが止められない。

「ダメならそう言ってくれ。でも君を見ると、昔のバカな俺を見てるみたいで」

監禁状態で勉強させられ続けた中学時代。何の楽しみも無く、言われたとおりペンを動かしたり暗記したりする機械だった。

高校に入ってやっと掴んだ自由は本当に楽しかった。ダチと喋るのも、遊び行くのも、何を取っても生きてるって実感があった。

「ごめん、1人でベラベラ喋って。勝手な理由だけどさ、わりと本気だから」

真剣な面持ちで雫を見つめていると、薄紫の瞳の奥に好奇心の光が揺らめいた気がした。

「わたしがいて迷惑じゃないですか？」

「全然そんなことないぜ」

「でもシンさんの話だと、わたし言われたことしかできない機械だつて……」

「それはバカな昔の俺。自我の無いアホだなんて笑ってくれればいいよ。雫にはそうなつて欲しくないだけだ」

「そ、そうなんですか。わたし間違えて、あはは」

「ぎこちない照れ笑い。初めてやったらしいその笑い方は、今までで一番魅力的だった。」

「明日が楽しみだなあ。こんな気持ちになつたのは初めてかもしれない」

「そりゃ良かった。いい日にしような」

布団を並べて2人は横になった。雫がどうしても言うので、一緒の部屋で寝ることになったのだ。

遠足を待ちわびる子供のようにはしゃぐ雫を見ると、自然と頬が緩んだ。彼女というより子供を持ったような気分だ。

「明日は最初はどこに行くんですか」

「そうだな……雫は服とか持つてる？」

「いえ、巫女の服とこの浴衣だけです」

そいつって無邪気に胸元の布をパタパタさせた。見えそうで見えないという目の毒がばら撒かれて危険だ。

「そ、そっか。じゃあかわいい服でも買いに行こうか」

目のやり場に困りつつ、シンは答えた。

なにしろこの超絶美少女っぷりだ。何でも似会うというか服が負ける。

「んんんたあのしみい」

「おいおい、分かつたから落ち着いてくれ」

雫は喜びを駄々漏れにさせて身悶えしている。本当はよく分かつていないが、なんだかすごく嬉しいのだった。

そんな彼女を見て、シンも本当に来てよかったなと思った。何か忘れていたような気もするにはするが、今は明日のことしか考えられない。

2人は興奮冷めやらず、しばらく喋っていたが騒ぎ疲れた雫が先に寝てしまったのでシンも寝ることにした。

だが思うように眠れない。

子供のように興奮していたのはシンも同じだった。

部屋の電気は落としたが、障子越しに月光が差し込んで意外と明るい。隣では雫が無防備にすやすやと静かな寝息を立てている。

ここにいと変な気を起こしかねないので、シンは部屋を出た。ひんやりとした夜気が我知らず火照った身体に気持ち良かった。しばらく広く長い回廊を歩いていると、人影が角を曲がるのが見えた。

今この神社には雫と自分しかない、と聞いていたシンは不審に思ってから後をつけた。

寝ていた部屋から結構離れたところまで行って、雫が大きな観音開きの扉に入るのが見えた。

(こんな時間になにしてるんだ)

シンは好奇心を刺激され、こっそりと中に入ってみた。

そこは社殿に囲まれた中庭のような場所。

敷き詰められた白砂利は夜の頂点に昇った真円の月の光を照り返し、そこ以外を闇に沈める。

暗黒から切り取られた白い聖域の中央にそびえ立っていたのは、巨大な紫の桜だった。

シンは息を呑んで立ち竦んだ。

宝石のように光る紫花が無数の枝を覆いつくし、完全な姿の衛星さえひれ伏す極美を誇示していた。

目が離せない。息が苦しい。肌は鳥肌。

次第に心臓が早鐘を打ち、ドクドクと熱い血が全身に回った。

「うつ……」

異変を感じて下を向くと、痛いほど勃起した自分のモノが目に入った。

なんだこれは。

哺乳類の牡は死に直面すると種族保存のために自動的に勃起すると聞く。

死とこの桜と一体どういう関係があるというのだ。だいたい何故今『死』なんてものが出てくる。

そうじゃないとしたら、まさか俺はこれに欲情しているのか。動物ですらない桜の樹に。

シンは理解できない現象に混乱していた。

「母様っ、明日外に出てもいいよね。わたしこんなに嬉しいの初めてなの」

桜に氣をとられていたシンの耳に、雫の声が飛び込んできた。

見れば彼女は白砂利に座り込んで紫の桜に話しかけていた。

「……だめ？　なんで？　きっと楽しいよ。シンさんは他の人と違って優しいもん」

シンは見てはいけないものを見た気がして部屋を出ようとした。

足音を立てないように後退していると、背後で勝手に扉が閉まった。

「え？」

声が共震した。雫が振り返り、視線が交錯する。

長い沈黙の後、雫は声を上げて泣きはじめた。

「あああ、母様あ……やめて、ひどいよあ、うつ……やめてったら雫、落ち着け。俺はあれくらいじゃ嫌いになったりしないよ」

シンは中庭に飛び降りて、雫に駆け寄った。やたらと刺々しい砂利が突き刺さって足の裏から血が滲んだが、そんなことはどうでもいい。

今の言葉に偽りは無かった。一般人とは生きている環境が違うの

だから、あつて当然の差異だ。

「違うの……はやく逃げてえ」

「何言つてんだよ！」

嫌われたくない一心で雫の肩を抱き、必死に誤解を解こうとした。しかし、雫はいやいやと首を振ってシンを突き放そうとするばかりだ。

何かがおかしい。食い違つてゐる気がする。

シンがそう思つた瞬間、か弱い雫の腕で突き飛ばされ縁で頭を打った。

霞む視界の中で雫とその後ろの紫桜が重なつたように見えた。

「はやく……にげ」

明らかに変調をきたしている雫に、シンもようやく従つた。

縁を登り闇の中を駆けて、扉に辿りついた。

「開けこのクソ！」

押しても引いても、渾身の蹴りを入れても扉はビクともしない。背後に異様な気配を感じて振り向くと、泣き崩れていた雫が立ち上がってこちらへ歩いてきていた。

大丈夫なのか、と声を掛けようとしてシンは硬直した。

薄紫から紫紺に変わった瞳。桜の威容を背に負い、止めどなく涙を流しながら笑っている。

参道で出遭つた黒い影が冗談に思えるほどの絶対的な恐怖。

勝手に足が動いて距離をとろうとしたが、数歩も進まないうちにシンは前のめりに倒れた。

「んだよ、これは」

右足がただの肉の棒になつたように動かない。除霊のために貼られた御符が妖しく光っていた。

剥がそうとしても剥がれない。

芋虫のように惨めにのたくっているうちに、雫はシンのそばに来ていた。

雫はシンの襟首を掴んで片手で放り投げた。

桜の幹に勢いよくぶつかり、呼吸が止まりかけ。

根元に崩れ落ちたシンの頭上では、紫桜はまるで心臓でもあるかのように光を放ちながら鼓動していた。

手足をバタつかせて起き上がろうとすると、砂利の中から真つ二つになった頭蓋骨が顔をのぞかせた。

これ全部人骨か。何人殺してんだ。

シンは一瞬動きを止めたことを後悔することになる。

「うぐあああ！」

高速で飛来した鋭利な人骨が両手のひらに突き刺さり、魔性の桜に繋ぎとめた。

寄りかかって座るような格好になったシンを雫が見下ろしてきた。

「うあああ……やだあ」

雫は嗚咽をこぼしながらシンの服を脱がしていった。

濡わになったイチモツに雫が腰を落とす。桜の魔力でもうすでに濡れている秘所は簡単にシンを受け入れた。

神社の中、満月の直下、紫の名桜の根元、異常な状況で突如始まった常軌を逸した性交。

殺すだけなら必要の無い行為。さしづめ雫への罰ということなのだろう。

シンは金縛りにあつたかのように身動きがとれず、雫は泣きながらシンの上で腰を振っていた。お互い意志に反しているのは明らかだ。

こぼれた精、流れ出る血、苦痛に快樂、魂。あらゆるものが吸われていく感覚に襲われた。

こうやって皆死んでいったんだ。俺も骸骨の仲間入りか。そんな諦めだけが吸われずに増えていつているようだった。

その時雫が一際大きく泣いて、シンの首を絞めはじめた。

絶え間ない快感と呼吸できない苦痛で気が触れるそうだと。しかも意識を失いかけると手が緩むという狂気の交わり。

そんな生死の狭間を行き来している内に、シンはおかしな声が聞

こえるようになった。

『もつと綺麗に、もつと美しく、あの人を振り向かせるために』
それは一途な恋の調べ。

『血が欲しい。命が欲しい。魂が欲しい』
狂える欲望を抱く何者かの呻き。

『あの人はどこ。この頃ずっとここへは来ない。それはわたしが醜いから。それはわたしが目立たないから』

次第に悲痛な響きを孕む悲恋の歌。

『醜いものは嫌われる。目立たないものは無視される。永遠不滅の美貌が欲しい。あの人を釘付けにして離したくない』

だからわたしは血が欲しい。命が欲しい。魂が欲しい。
百殺して紫になった。二百殺して冬にも耐えた。三百殺して掃除もさせた。殺すたびに美しくなった。

それなのにわたしはまだ醜いとおっしゃるのですか。一体誰に劣っているとおっしゃるのですか。

答えてください。西行法師様。

「……勝手なことぬかすなよ、バケモノ」

シンは意識が現世に戻った時を見計らい、氣力を振り絞って言葉を吐いた。

その瞬間、雫が泣くのをやめ動きを止めた。

一抹の希望が見えた気がする。それだけあれば何でもやってやろうと思えた。

再び始まる相互レイプ。

挑発は危険な賭けだが、相手は確実にシンを認識したらしい。

『わたしは美しくなる。まだまだ殺し足りない』

「殺したら綺麗になれるってどんな理屈だ」

屍山血河に生える桜なんて鬼も見ねえ、まして西行が振り向くはずもない。

だいいち自分の恋愛に他人巻き込むな。男は自分勝手な奴は嫌いなんだよ。そんな長生きして、そんなことも知らんとか笑える。

『殺してやるから!』

雫が白砂利の中から杭のような骨を持ち上げた。

礫にされ、肉体的にも結合している状態で避けるのは不可能。振り下ろされたら終わる。

「お前西行を探してるんなら無駄だぜ。もう死んでる」

『……でたらめ言わないで!』

「何年ここに来てないんだ? 数え切れなくらいだろ? 人間の寿命は長くない。考えなくても分かるだろ」

でも俺は居場所を知っている。

長引かせても何してくるか分からないから、さっさと切り札を切る。これでダメなら自殺してやる。思い通りにはさせない。

「極楽つて知ってるか。仏様のいる所、そこで歌詠んで楽しく生きてるさ。行き方も教えてやるから、まず雫と俺を解放しろ」

手を戒めていた骨剣が勝手に抜けた。激痛に耐えながら服を着て、桜に向き直る。

素直なやつは嫌いじゃないし、仮にも女なんだから待たせるも嫌だった。

『教えてよ』

期待の色を隠せない急いた声。

本気で想っているのが分かった。だからこそはやく凶行を止めさせないといけない。

「散れ」

『……』

「日本人がなんで桜が好きか分かるか。散り際が美しいからだ。年がら年中咲いてるなんて空気読めてない」

だから散れ、枯れちまえ。天国行つてに想い伝えて来い。西行もそんな無常むぐさが好きなんだろうよ。

夜が震えた。

不滅の妖桜が溜め込んだ幾百の魂が散華していく。解放の歓喜に踊る人魂がシンと雫を取り巻きあそんでは、夜天に昇っていった。

同刻、参道の黒いもやも霧消した。桜に取り殺された人々の怨念、その独立体たる彼らは妖怪桜を見に行こうとする人を引き返そうと襲い続けていたのだ。結果として彼らは桜に利用されていただけだったが、今夜その徒刑も終わりを迎える。

最後に残ったのは、妖艶な色香の抜けた満開の山桜。死人の山に根付かなくとも目を見張るくらい綺麗だと思う。

はちきれんばかりに咲き誇らせた薄桃色の花が一斉に舞い落ちた。霊たちが巻き起こした超常の風に乗り、社殿の吹き抜けから外へ運ばれていく。月の光を浴びて輝くそれは早くも夜に溶けていった。

儚く消えてしまうからこそ、永遠を追い求めようとする。もちろん不可能と承知の上でだ。

それが日本人が愛した幻想の形。

（後書き）

その後の2人がどうなったかは想像におまかせします。
評価・感想など待っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2966m/>

罪桜綺譚

2010年10月8日14時30分発行